



# 市立加西病院

## 見えなない敵に立ち向かう

新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」）が拡大する中、「第2種感染症指定医療機関」として、北播磨地域の感染者を受け入れている市立加西病院。感染者の治療、療養を行う「新型コロナ専用病棟」で、「コロナと闘う医療現場の最前線を取材しました。

### 専用病棟19床に拡大

市立加西病院（以下「加西病院」）の前身である北条町富田村組合立国保北条病院が、昭和38年、それまであった結核病棟に加え、伝染病舎を開設しました。昭和49年には、現在の場所です立加西病院が開院し、引き継がれました。昭和53年には、播磨内陸医務事業組合



防護服に身を包み、業務にあたるコロナ病棟の看護師

で統一し、伝染病棟を管理するため、管理の所管替えがありました。平成11年に「感染症法」が制定されこれに伴い、兵庫県より第2種感染症指定医療機関として指定（第2種病室6床）を受け、播磨内陸医務事業組合隔離病棟は廃止されました。

新型コロナウイルス専用病棟（以下「コロナ病棟」）は現在19床。第3波とされる感染拡大で昨年11月から従来の第2種感染症病棟とは別に、中等症以上の重症患者を受け入れる病棟を増設しました。その後、感染症の波が押し寄せるたびに、患者受け入れのため、病床数を拡大していきます（下記グラフ参照）。

### 未知の怖さ

感染管理室の岸本室長は「第2種感染症指定医療機関である限り、感染者を受けなくてはならない。それはもう使命感しかないですね」と言います。

昨年の第1波の時には、新型コロナウイルスの正体はもちろん、感染

対策、治療法など、すべてにおいて未知の状態期間が続きました。

そのような中、加西病院は、北播磨で唯一、入院、外来ともに患者を受け入れることが決まりました。「発熱患者に関する対応が不十分なまま、入院、外来の両方のシステムを整えなければなりません」と。またこの時期には、まだ加西病院にはPCR検査がありませんでした。誰が治療するのか、検査体制は、勤務体制は、防護服は、それぞれどうしたらいいのかなど、その両方のシステムを構築することが最初の作業になりました」と岸本室長。同時に世間では、いわゆる「コロナ差別」的な噂が飛び交っていました。完全なる正体がわからない不安を抱えたまま、そのような時期に陽性患者と向き合い、看護を行うことは正直、不安と戸惑いがあったと言います。しかし、医療従事者としてのプライドで乗り切ります。

加西病院新型コロナ専用病棟 病床利用率

